補遺：第 57 巻第 4 号掲載野垣論文に対して

# 「頭部外傷に関わる耳鼻咽喉科の役割」（野垣岳稔他）論文に対する補遺

中村　紀夫

東京慈恵会医科大学名誉教授

（平成 21 年 7 月 26 日受付）

先般，耳鼻咽喉科の野垣岳稔先生が，頭部外傷についての大変興味深く優秀な論文を，貴誌の 57 巻 4 号 178 ページに寄稿されました. 私は脳神経外科に入局して以来 50 年以上, 頭部外傷をライフワークのトップにして勉強・研究し, 診療に従事してきました. ここで申し上げる問題はめったに見られない幼児の事故で発生する脳外傷なので，頭部脳外傷の臨床統計に計上されることがありませんが，耳鼻咽喉科の医師が頭部外傷の患者の治療に参画する稀な場合として，決して忘れることなく気を配って頂きたい事が一つあります.

50 年くらい前のことです．耳鼻咽喉科の医師から連絡がありました．箸をくわえていた幼児が走って転んで，箸がのどに刺さって折れ，箸は口から飛び出した．本人はケロッとしているが，折れた先が一緒に飛び出したか刺さったまま喉に残っているか分からない．ちょっと診てください，と言う．当時の画像診断では箸を造影出来ないので，私でもわかりませんが，もし脊髄腔にまで刺さっていれば危険な脳脊髄損傷や髄膜炎を後発する可能性があります．そのような危険な状況なので，この耳鼻咽喉科医師は素晴らしい判断で私にコンサルトしたわけです.

脳神経外科・耳鼻咽喉科協力で咽頭の刺入部を切開しますと 1 センチメートルの先端部が見つかり，こわごわ抜いたところ，孔から脳脊髄液が漏れ出しました．なんとか漏れを抑えて創を閉じ，抗生剤を用い何事もなく全治しました.

幼児が箸を喉に刺して脳挫傷を発生するという，きわめて稀ですがまことに日本的な脳外傷メカニズムでは，親は患児を脳神経外科ではなく耳鼻咽喉科につれてゆきますから，前述のように耳鼻咽喉科からは必ず脳神経外科に相談してほしい，以来機会あるごとに，耳鼻咽喉科の先生にも医学生にもこのお願いをしています．耳鼻咽喉科から提出する脳外傷の論文にはぜひ考察に追加して下さい.

（日職災医誌，57：268，2009）

## 文　献

1）佐藤美代（千大），他：口蓋外傷．耳鼻咽喉科　32（8）：656, 1960.

2）真栄城徳佳（三大）：Jackson 麻痺と化膿性髄膜炎を併発した上咽頭外傷の一例．三重医学　7：36, 1963.

©Japanese society of occupational medicine and traumatology　　http://www.jsomt.jp